

いたという。また、京都の学者が所蔵する書物を借覧するのに、錢五万疋（米五〇〇石相当）を送ったともいう。

こうした貴族趣味は、庶民の生活感覚からかけ離れ、若くて無骨な陶隆房らの批判を受けることとなった。

大規模な軍事と奢侈な生活は、財政をも破綻させ、あらゆるものに税をかけ、基本的な財源である段錢をも増徴する法律を出した。

天文五年（一五三六）、「今度、加増段錢の事に就き、……今度の儀ハ、前々御免許の地を謂わず、申し付くるべし」（永弘文書）と、全分国から取り立て、未納の場合は土地を押さえ、年貢から必要分を引き取るというものであった。

豊前守護代杉 大内盛見時代から約一五〇年間豊前守護代を

重矩の離反 務めてきた杉伯耆守家は、豊前国内隅々まで名主・百姓層を被官化し、領国化を進めていた。それは周防における陶氏、長門における内藤氏も同様であった。

杉重矩は陶隆房・青景隆著に反逆の志があるとししばしば議論したが、義隆の右筆相良武任が妨げて通じなかった。

ついに、重矩は内藤興盛とともに陶隆房に与し天文二十年（一五五二）九月、大内義隆を攻め、滅ぼした。



杉重矩の花押

第二節 戦国時代

大友宗麟 大内義隆が滅亡した二か月後、肥前国では大内**豊前進出** 氏の分郡東部三郡の守護代であった龍造寺隆信

が佐嘉城を出て、筑後蒲池氏の柳河へ亡命した。

龍造寺氏と争ってきた肥前の国人が少弐冬尚を奉じて大内氏の支配から独立しようとした。

二年後、龍造寺隆信は佐嘉城を奪還した。彼は少弐氏に対抗して、大友宗麟を肥前国守護職とするという条件で、大友宗麟が筑後の国人を支援させ、帰国させたのである。

大友氏は足利尊氏のころ、肥前守護であった前例が天文二十三年（一五五四）八月、室町幕府の承認を得ることを可能にしたのである。

これに味を占めたのか、大友宗麟は豊前・筑前へも野心の手を伸ばすことになる。

山口では、陶隆房が大友宗麟の弟晴英を大内家に迎えて、大内義長と称させ、自らも晴賢と改名して独裁の色を強めた。大友宗麟は弟に橋爪鑑実を付けて、大内家の奉行衆とし、「両家御一体」を強調して、大内分国に楔を打ち込んだ。

また、高橋鑑種を太宰府の宝満岳城督として筑前国に送り込み、豊前・筑前方面の奉行衆として、両国の政治に携わらせ



大内義長の花押



陶晴賢の花押

た。

高橋鑑種は豊後の重臣一万田鑑相^{あきすけ}の弟で、豪勇な武将として知られており、筑前大蔵一族の名家高橋家を継ぎ、太宰府に配置されて、大友氏の筑前の拠点である博多・立花城・柑子岳城^{こうじ}（糸島）と筑後国を結ぶ連絡路を確保し、少貳氏と結び独立性の強い秋月氏・筑紫氏等の動きを監視する役目を担わされた。

これは弟の山口渡海の際に、大友宗麟が陶隆房の了解を得て実行されたと思われる。

天文二十一年（一五五二）十月、豊前守護代杉伯耆守重矩が切腹させられ、その子重輔を豊前守護代とした。陶晴賢は主人殺しの汚名を恥じて、重矩の讒言によるという罪を彼に負わせた。

翌年十月、大内道頼挙兵以来、犬猿の仲となっていた吉見正頼が津和野三本松城に挙兵し、長期にわたって陶晴賢に抵抗した。

その間に、毛利元就は家臣小寺元武・生田新五左衛門尉を豊

後府内に派遣して、大友宗麟と交渉を進め、天文二十三年（一五五四）五月、恐るべき密約を成立させた。

それは、大内義長の分国を両者が分け取る、すなわち、毛利元就が安芸・周防・石見・長門四国を、大友宗麟が豊前・筑前二国を侵略するのを妨げないというものであった（萩藩閥閥録、小寺文書）。

毛利元就は、この月、安芸国の接收を開始した。

これを知った陶晴賢は、吉見氏と和睦し、毛利元就討伐の軍を発し、厳島に渡った。

しかし、天文二十四年（一五五五）十月、安芸水軍の急襲にあつて、陶晴賢はあつてなく敗死した。

その翌月には、肥前の少貳方の調略によって筑前の秋月文種・筑紫惟門^{これかど}らが国人一揆を成立させ、大内義長の支配から独立する行動に出た。

秋月文種は豊前の国人にも呼びかけ、豊筑肥三国の国人が神裁や縁組みをなして団結し、大内・大友両家一体の支配に対抗する構えを示した。

豊前国で一揆に加わったのは下毛郡代野仲鎮兼^{しげかね}、上毛郡の山田隆朝とその一族仲間氏^{なかま}（山国町）中八屋氏等である。

弘治二年（一五五六）三月、内藤隆世（長門守護代）と杉重輔（豊前守護代）とが、陶晴賢跡の権力の座を山口で競っているうちに秋月文種は「田河面^{おもて}」は、京都郡久保・稗田より入学・

高木に至るまで放火し候の条、この方よりも日々打ち廻りの段申し付け候、去る十三四兩日、小倉表に至り手仕え候」(大友家文書録)と妙見岳城督杉隆哉^{たかとし}が述べているように、豊前に侵入を開始し、味方に加わらない村々に放火して引き上げた。このとき「神代余三兵衛尉弘綱の事、馬岳御城督として在城せしめながら、引き籠もり、謀反人すでに□□□、御難儀の条、弘綱の科通れがたきの条、□□□においては闕所せらる也」(緒方文書)と、馬ヶ岳城督神代弘綱は籠城して、秋月文種の打ち廻りに消極的であつたことが咎められ、城督を解任され、所領を没収された。

それから一年後の弘治三年(一五五七)三月には、「殊に、馬岳の様牀、事実に於いては是非無く候、しかし、御下知により、かくの如く候哉の由、御不審半ばに候、山口の儀も種々実所無く申し来たり候」(佐田文書)と、大内義長滅亡の一か月前に馬ヶ岳城が秋月文種によって占領されたことを宇佐郡代佐田隆居^{たかすゑ}が大友宗麟へ報告している。これは、大内義長の下知によって馬ヶ岳を放棄したのではないかと、大友宗麟がいぶかしんでいると大友家加判衆は述べている。

このころ、大内義長は毛利元就に敗れ、山口を捨てて長府且山城に籠城していた。馬ヶ岳占領と時を同じくして、下毛郡でも、野仲鎮兼・仲間弾正忠らは万代平城(耶馬溪町福土)の城督豊田英盛^{ふさもり}を殺害し、城を乗っ取る行動に出ている。

これを聞いた大友宗麟は「防州へ飛脚を出し、その返事によつて出兵の命令を出すつもりである」と、佐田隆居へ伝え、豊前への出兵に遠慮している。

野仲鎮兼は既に大友義鎮の一字を頂戴しており、臣下の礼をとつたあと秋月文種に一揆したのであるか。

弘治三年(一五五七)四月三日、大内義長が下関長福寺で切腹した。

その三日後、大友宗麟は佐田隆居へ「ここもと、ご繁多なので、まずもつて然るべきよう裁判してください」と、豊前に対する命令を初めて出した。ま



写真4—14 嘉穂町から見た古処山城

た四月十二日には「義長不慮の注進を受けましたが、覚悟の前なので、たとえそれが事実であつても、仰天には及びません」とも述べている。それまで弟と秋月氏との戦争を静観して、両者の消耗を待っていた感のあつた大友宗麟は、この日、豊前・筑前出張の意志を伝え、その準備を命じた。

同年五月、大友宗麟は玖珠

郡へ動座し、豊後の主力を秋月文種の拠る古処山城（甘木市）に向け、国東・速見郡衆を山田隆朝討伐と馬ヶ岳奪回に向けて、国境に終結させた。

（長房カ）

五月二十八日、山田・中八屋衆が城井左馬助の居城に押し寄せた後、六月十八日、広津鎮種の居城へ押し寄せた。ここには、田原親宏家来を檢使として、杉隆哉勢・宇佐郡・下毛郡衆が籠城し、これを待ち受けて防戦し、山田隆朝・仲八屋英信・仲間・如法寺勢を敗退させた。

六月一日、武蔵田原親賢が妙見岳に登城し、杉因幡守隆哉は下城して、広津城に移った。

六月二十日、国東田原親宏勢一〇〇〇、富来・真玉・都甲等北浦辺衆三〇〇〇、武蔵田原親賢・木付衆二〇〇〇、合計六〇〇〇と宇佐・下毛郡衆が上毛郡一帯に放火し、一日で山田城を攻略した。

山田隆朝は行方をくらませたが、子息満千代は捕らわれ、首を玖珠郡の本陣へ送られた。この戦で上毛郡の男女四分の一が逃亡した。六日後、仲八屋英信は降人となって現れた。

① 一、同七月三日、中津郡に至り陣替なり、同四日、馬岳落居なり、城督ヨシカイ、同ミナ木甲斐守、その外秋月衆百ばかり打ち取り候、

（永弘文書）

② 今度、馬岳小城の切り岸において、最前より御放戦の趣、比類無く候、殊に小城調略の儀、御一人の御才覚、他に異ならず候、御粉骨

の次第、注進を遂げるべく候、恐々謹言、

「弘治参」七月九日

親宏（花押）

佐田彈正忠殿御陣所

（佐田文書）

豊後勢は馬ヶ岳の秋月勢一〇〇人ほどを一攻めに抛り、田河路を古処山に向かった。豊前の支援軍が到着する前、七月七日、城内に裏切る者が出て、古処山城の秋月文種は殺され、落城した。

文種の幼少の子供三人は毛利氏を頼って姿を消した。

こうして、大友宗麟の目的は果たされ、九月、九人の檢使が派遣され、敵対者の所領や闕所地を調べ、逃亡した住民を帰住させ、檢使の報告を待つて、恩賞を発表し、檢使に執行させた。

大友宗麟と毛利元 少貳家再興を名目として、龍造寺隆信・

就の豊筑取り合い 大友宗麟の支配を排除しようとした豊

前・筑前・肥前の国人一揆は張本人と見なされた秋月文種・山田隆朝の滅亡によって挫折し、大友宗麟は豊前・筑前の占領を達成した。

しかし、一揆の人々は、周防・長門に進出した毛利元就を新たな盟主と仰ぎ、大友宗麟の支配から独立しようと次々と蜂起したから、大友宗麟はその討伐に明け暮れることとなった。

永祿の十二年間は、大友・毛利の豊筑取り合いの時代であった。

永祿元年（一五五八）の小倉打ち廻り、宗像大宮司氏貞の挙兵、永祿二年の筑紫惟門の博多占領や侍嶋（大木町）合戦、西郷遠江守隆頼の仲津郡での挙兵、毛利方の門司城占領、野仲鎮兼の挙兵と、大友宗麟は息つく暇もなく豊後より派兵しなければならなかった。

左は西郷隆頼挙兵に関係する史料である。

①（花押）（大友義鎮）

永祿二年八月廿二日、西郷遠江守の要害攻め口において、佐田彈正忠隆居の人数分捕り高名の次第、着到、銘々披見を加えおわんぬ。

頭一西郷弥三 遠江守弟 平賀彦次郎これを討つ

同一田平源五郎 弥三郎これを討つ

同一 宗源次郎これを討つ

同一 永松民部丞これを討つ

鐘疵一ヶ所 高並刑部丞 鐘疵三ヶ所 賀来神三郎

矢疵一ヶ所 小田善太郎 石弓 高並右馬允

石弓 永松源次郎 刀疵 平郡善三

石弓 賀来市助 矢疵一ヶ所 平兵衛

矢疵一ヶ所 賀来中務丞

鐘疵二ヶ所 賀来備後守僕従 又右衛門

鐘疵一ヶ所 賀来善三郎僕従 小次郎

鐘疵一ヶ所 賀来市助僕従 与太郎

矢疵一ヶ所 同人 僕従 中六

鐘疵一ヶ所 賀来中務丞僕従 新九郎

石弓 同人 僕従 神三

石弓 岩田刑部丞僕従 八郎左衛門尉

鐘疵一ヶ所 出原小八僕従 藤七

已上、（佐田文書）

②去る廿二、西郷遠江守の要害に至り、取り懸けられ候の刻、親宏の人数、或いは分捕り高名、或いは疵を被り、戦死の趣、着到披見を加え、袖判をもつて申し候、度々に及ぶ粉骨の次第、御太忠、誠に比類無く候、その辻をもつて、過半その国案中に属し候、然らば門司・花尾・高春岳、未だ落去せずの由候条、親賢と申し談じられ、残党足を抜かざるの様、打ち果たさるべき事頼み存じ候、（下略）

（永祿二年）八月廿六日 義鎮在判

（親宏）田原常陸介殿（大友家文書録）

ここで、西郷隆頼要害とは不動ヶ岳城（犀川町大村）のことであろうか。門司・花尾・香春岳城と同時に挙兵したが、国東・武蔵の両田原勢や宇佐郡衆に陥落させられた。

今度、旁儀、この方御取り退き、尤も本望に候、両国弓矢の儀、是非共、来春存じ立つべく候条、諸境目の事、内々御調略肝要に候、なお山田安芸守方より申さるべく候、恐々謹言、

十一月十日 （毛利） 隆元（花押）

（毛利） 元就（花押）

西郷遠江守殿御宿所 （西郷文書）

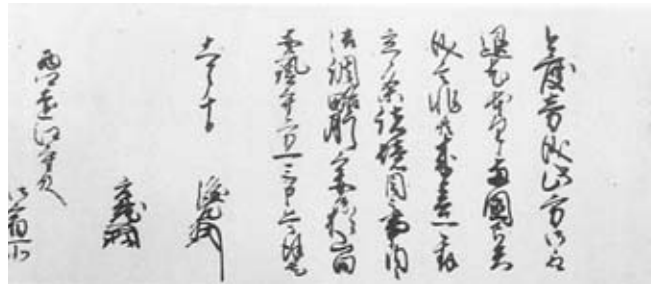


写真4—15 毛利元就・隆元書状

これは、要害を落した西郷隆頼が長門へ行き、山田隆朝とも相談して、豊筑での調略（寝返りの勧誘）活動を命じられている。

こうしたなかで、大友氏は、幕府周辺へ献金を続け、拡張した分国の支配を正当化する中央工作を進めた。

永禄二年（一五五九）、少弐冬尚が龍造寺隆信によって滅亡させられたのを契機として、豊前・筑前・肥前守護職に補任され、翌年には九州探題職・大内家督職に任ぜられ、更に長門・周防二国の守護職にも補任されて、防長進出をも正当化することになった。名目のみとはいえず、大友宗麟は豊後・肥後・筑後・豊前・筑前・肥前・長門・周防八か国の守護兼九州探題となり、まさに得意絶頂に達した。

永禄二年八月、西郷城を攻略した両田原勢は九月廿六日、門司城を攻めて奪回し、城督波多野大和守興滋^{おきしげ}らを討ち取った。この間、宇佐郡の佐田隆居^{おさなり}と安心院興生は馬ヶ岳勤番を命ぜられた。



写真4—16 門司城址

豊前鎮定の功勞として、両田原氏は豊前各地に広大な知行地を得たらしく、永禄三年（一五六〇）には家来に給地をあてがっている。

平田左京進の先給京都郡の内、吉国村鍛冶屋名四町二反四十代の地、去々年より御分別をもつて片山市之佐方え仰せ付けられ候といえども、久保庄の内たるの条、荒木出羽守方へ遣わされ候、かの方忠儀の筋目の仁に候間、代地仰せ付けらるべきの由二候間、吉田庄の内、真鍋先給分四町弐反四拾代の事、古証のまま打ち渡さるべきの由、よくよく申すべき旨二候、恐々謹言、

六月二日

（利行 諸籌

（溝部 定世

萱嶋長門守殿まいる（萱嶋 親当

（片山 文書）

これは、片山氏に与えた吉国村は久保庄内と分かったたので、荒木氏へ与えた。代わりに吉田庄の真鍋のうち四町余の分を片山氏に渡せと親宏の代官に親宏家老衆が命じたのである。

永禄三年（一五六〇）十二月、仁保^{なかつ}隆慰（前大内家奉行衆）が門司城を奪回した。以後二五年間、門司城は毛利氏の九州での拠点となった。

毛利元就は隆慰に規矩一郡の給人領・寺社領の代官職と、門司城近辺の三郷を与え、豊筑の国人との連絡を強めさせた。

永祿四年（一五六二）、大友宗麟は二加判衆（吉岡長増・臼杵鑑速^{あきはや}）と六人の国衆^{くにしゅう}の兵二万を豊前に送り、香春岳・門司城の奪還を目指した。

九月、やつと香春岳を攻略した豊後勢は二か月間、門司城を包囲攻撃したが成果なく、かえって、小早川水軍に蓑島・今井辺に待機していた豊後水軍が襲われ、数十艘が拿捕^だされ、更に京都・仲津郡が毛利方に寝返った杉隆哉らに占領されたから、豊後勢は補給路・退路を分断され、長陣に寒波も加わって、十一月五日、出直しを決意した。

豊後二老は夜間に小倉より貫山を越え、彦山下を通って日田にたどり着いた。宇佐郡衆も日田へ出た。

田原親宏ら国東郡衆は貫山を越えてから黒田原・天生田・国分寺原・椎田の道を通って帰国したため、父因幡守重昌以来この辺を拠点としてきた杉隆哉が小早川水軍を案内して、終日、田原勢を付け送ったから多数の犠牲者を出した。

左は多数残存する史料のうちの一つである。

去る十一月五日の夜、門司表御退陣の刻、御陣屋より同御陣山の麓に下り申し、御乗馬成られ、門司浜の如く御馬召し出し、大裏、赤佐古、筑波、貫越えまで、夜中少しも御馬を離れず御供し候、翌日六日 未の刻、豊前国京都郡黒田原を初めとして天生田・国分寺を限り、野島・来島・

浦兵部丞、杉因幡守を前として、数百人あらわれ、付け送り、折々宗徒^{むねと}の衆歴々御用に立つ時節、既に御自身御手を碎かれ、おのおの一命を捨て鐘仕る事、終日その数を知らず、誠に忝なくも神慮仏慮をもつて御運を開かれ御着館、公私の安堵この時に候（下略）（津崎文書）

この豊後勢の敗退で、豊前の西半分を毛利方が占領した。この敗戦に衝撃を受けた大友宗麟^{そうりん}はしばらく精神不安定となった後、三十二歳の若さで出家し、宗麟と号し、臼杵の居城を強固に修築して住んだ。

永祿五年（一五六二）、毛利元就は全力を尼子義久打倒に集中し、出雲白鹿城^{しらが}（松江市）攻撃に移っていた。尼子義久の要請を受けた大友宗麟は再度豊前出兵を命じ、二老（戸次鑑連^{へつぎあきつら}・吉弘鑑理^{あきただ}）と七人の国衆を派遣した。

毛利方は香春岳・松山城・門司城に籠城して持久戦法をと、できれば一時的に講和して、尼子氏攻撃に傾注したいと考えていた。

香春岳には前筑前守護代杉豊後守連緒^{つらつぐ}に杉元相^{もとすけ}を付け、松山城（荊田町）には前豊前守護代杉伯耆守重輔の幼子松千代（重良）に天野隆重を補佐させて、豊後勢の数次に及ぶ攻撃を退けた。また、この年、宝満岳城督高橋三河守鑑種が毛利方へ寝返って、大友宗麟を激怒させた。

高橋鑑種は大内義長の筑前守護代、豊筑奉行衆として重要な役割を務めてきたが、大友宗麟に恩義を感じるところか、恨ん



写真4—17 荻田松山城址

でいた。兄一万田鑑相^{あきすけ}や親類が私的なことから討伐され、大内義長の支援要請を無視して、見殺しにしたことで不信感を抱いていた。

毛利元就は、大友家筑前経営の要とも言うべき存在であった高橋鑑種が寝返るとは思っていなかったから、彼が筑前一四郡のうち六郡を要求すると、躊躇することなくこれを与え、松山城―馬ヶ岳―障子ヶ岳―香春岳―太宰府―肥前のルートを確保した。

松山城の攻防戦が膠着状態になって、將軍義輝^{よしの}の使節による和平斡旋が進められているころ（永祿六年七月）「京都郡の内、（吉弘）鑑理知行する黒田村に至り、向より杉因幡守の手の者共、取り渡り、妻子以下引き取るの由に候、是非に及ばず候、かくの如く候儀、さらにこれ有り難き儀に候」（大友家文書録）と大友宗麟が毛利方の和平に対する疑わしい出方を嘆いている。これは加判衆吉弘鑑理が知行している黒田村へ、松山籠城中の杉隆哉の手に加わっている者たちが、ひそかに帰り、妻子らを松山城へ引き取ったことらしい。

このころ、次の史料が見られる。

① 豊前国京都郡の内、岩隈村四十町、上毛郡の内、安雲式拾町分の事、これを預け進じ候、御知行有るべく候、恐々謹言、

十一月一日

宗麟在判

田村三郎入道殿

（大友家文書録）

② 豊前国京都郡の内、岩隈村六十町、上毛郡の内、上野村四十町分の事、これを進じ候、知行有るべく候、恐々謹言、

十一月一日

宗麟（花押）

（鑑堅）
戸次中務少輔殿

（横山文書、宇佐神宮史料）

大友氏は知行を与えるとき、「預け置く」と表現する。これは守護大名が室町幕府から預けられた闕所地を家臣に一時的に預けておくというもので、随意に取り上げることができるということを意味する。「預け進ず」という表現は、大身の武士に対して使用する。田村宗切という人物は大友宗麟が親しく心情を打ち明ける間柄であったが不明な人物である。②の史料は「郡」や「預け」の字を欠いている。また上毛郡上野村も不明である。検討の余地がある。

戸次鑑堅^{あきかた}は、立花道雪の弟で永祿十年（二五六七）九月、秋月休松の合戦で戦死しているから、この史料は永祿八年ころのものであるうか（立花家文書）。

永祿六年（一五六三）三月には二年がかりの和平調停が妥結にこぎ着けたが、神文交換は七年七月になった。その内容は

① 大友・毛利両家が新たに婚姻関係を結ぶ、



写真 4—18 太宰府宝満岳城址

② 高橋鑑理・秋月種実・西郷隆頼などの豊筑の牢人を討伐せず、大友宗麟の家臣とする、

③ 香春岳・松山城は破却して大友方へ渡す。規矩一郡と門司城は毛利方が支配する。

というものであった。

毛利元就はこの条約を履行する気持ちはなかった。かれは二〇年来の宿敵尼子氏討滅が第一であり、白鹿城しらが攻略のため、下口での戦争を避けたのが本音で、時間稼ぎのため、將軍の調停に従うふりをした。

かれは豊筑の牢人衆に對して、富田月山城とだがきんの尼子義久屈服まで、大友氏支配下で堪忍しておくよう説得した。

「毛利きつねのならいを存分ニあてられ候」(大友家文書録)と憤慨やるかたない大友宗麟は、尼子義久とも連携して、行動を開始した。

永祿八年(一五六五)六月、食客大内高弘の子輝弘てるひろを伊予から周防大島に渡らせ、旧大内家牢人の挙兵を企てた

が、惨敗して豊後に逃げ帰った。

同じころ、両田原勢は、規矩郡に出兵して長野筑後守(名不明)を攻め、里城である長野山から奥城の三岳みつがたけへ追い込んでついに屈服させた。

これは毛利方にとって重大事件であった。これによって毛利領の規矩郡の過半が大友方に占領され、門司城が脅威に曝されるばかりでなく、香春岳・古処山城・宝満岳城・佐嘉城との連絡路を断たれることになった。

永祿九年(一五六六)十一月、宿敵尼子義久を屈服させた毛利元就は九州へ目を注ぐゆとりができた。豊筑の毛利方国人の期待に應えて、渡海することを告げ、高橋鑑種・秋月種実・龍造寺隆信らに蜂起を促した。

永祿十年(一五六七)六月の高橋鑑種の宝満岳城挙兵をきっかけに、龍造寺隆信・筑紫惟門・秋月種実・西郷隆頼・杉隆哉らが次々と挙兵した。

今度、西大野宮山に至り、芸州衆数輩楯籠もるの条、去る五月廿日取り懸けるの処、軍勲これ抽んず、あまつさえ一城落去の刻、夜中最初に馳せ登る心懸けの次第、感悦の至りに候、同じく杉・西郷両城においても、累日防戦の段、承知せしめ候、必ず追つて賀与せしむべく候、いよいよ忠貞肝要に候、恐々謹言、

〔永祿十二〕

六月廿八日

萱嶋美濃守殿

(田原)

親宏(花押)

(萱嶋文書)

これは、門司城督仁保隆慰が五〇人ほどで宮山（小倉南区山本）に城郭を構え、長野氏の拠点三岳と等覚寺城を分断しようとしたので、両田原勢がこれを攻め落とし、杉・西郷両城をも攻略したときの感状である。「到津文書」の同年六月に「都郡大坂山ヲ杉因幡守・西郷兩人で取り誘え候、是又せめ落とされ、杉領も西郷も向参し候」とあり、大坂山城と両城が結びつかない。

岩隈城の合戦 このころ、次の史料が見られる。

前廿八、京都郡の内、岩隈村において、敵、楯籠もり候の処、助守、人数をもつて取り懸けられ、宗徒の者数輩討ち捕らるの由、注進到来し候、毎々忠貞の次第比類無く候、殊に被官の者共、粉骨の段、まことに感じ入り候、しかし、助守油断無き才覚故に候、何様取り鎮め、一廉その志を顕すべく候、申すまでも無く候と雖も、弥そこ表の儀、差し置かざる御心懸け頼み存じ候、入田丹後入道・城井左馬助・安東三郎に至りても、状をもつて申し候、倍申し談じられ、堅固の覚悟簡要に候、委細は猶浦上左京入道が申すべく候、恐々謹言、

（永禄十一年）
七月三日

（大友）
宗麟（花押）

長野三河守殿

（熊本、合志文書）

これは、永禄十一年（一五六八）六月二十八日、岩隈城に毛利方がたて籠もったので、長野助守（俗書では祐盛、等覚寺城主）が入田丹後入道・城井左馬助・安東三郎らとこの城を攻

め、中心的な数人の首を切ったというもので、入田丹後守義実（入道宗和）はのちに島津軍を豊後に誘導した人物として有名である。かれは当時、障子ヶ岳か馬ヶ岳の城督であつたらしい。城井長房は鎮房の親で、築城郡奉行だろうか、安東三郎は仲津郡奉行であろうか。

またこの時期、高橋鑑種が挙兵した二年前から、大友方が心配していた立花鑑載が立花西城督を追放して、毛利方となったことを明らかにした。

大友宗麟は直ちに戸次鑑連・吉弘鑑理らを派遣して、立花城を攻略し、立花鑑載を誅伐した。

三 岳 城 これを聞いた毛利元就は、吉川元春・小早川隆景に二万を超える兵を付けて渡海させ、元就自ら病をおして長府まで出張して督励したから、九州では空前の大戦争となった。

吉川・小早川の両川軍は、渡海すると、ただちに長野氏が拠る三岳城と等覚寺城に襲いかかり、永禄十一年九月、一〜二日のうちに陥落させた。三岳城は長野兵部少輔弘勝以下、田原衆・女子供まで一〇〇〇人余が壊滅したが、等覚寺城の長野三河守助守は豊後へ逃げた。のちに大友氏は彼を馬ヶ岳城督として京都・仲津両郡の治安維持にあたらせた。

立花城の 争 奪 戦 永禄十一年（一五六八）十月、両川軍は立花山を包囲し、籠城軍の水手を押さえ、食糧の尽き



写真4—19 立花山城址

るまで攻撃を繰り返して、翌年閏五月、降伏させた。

大友宗麟は、分国の兵五万人以上を動員して、自ら筑後高良山まで出張し、龍造寺隆信の佐嘉城と立花山、豊前方面での戦争の指揮を執っていたが、はかばかしい成果もなく帰国し、豊後水軍を使った別の作戦を講ずることになった。

またこのころ、両軍は豊前で新しい展開を見せていた。

又申し候、九州秋月所より使者到来し候、豊筑の事、かんしや

く・馬岳両城仕執り現形し候、豊筑より人の一人も、兵糧の一表も、防長へハ渡させましきよし申し越す事にて候々、この時はいよいよ山口の事、迷惑たるべく候々、肝要に候々、毎事、吉事重々申し承るべく候、恐々謹言、

六月十五日

元就（花押）
右馬（毛利輝元）

「元春参る申し給へ 元就」

これは、長府在陣中の元就が立花山陣中の吉川元春へ、秋月

種実からの報告を知らせたもので、両田原勢が、三岳陥落の際、占領されていた岩石・馬ヶ岳を奪回し、「山口と立花城を分断して、兵も食糧も撤収させない」といつているという。

毛利方も、水軍の一部を府内に侵入させて焼き打ちし、中津川口に上陸させて、付近一帯を焼き打ちして、野仲鎮兼の宇佐・玖珠郡への打ち廻りを支援し、豊前東部への進出を策した。

大内輝弘の山口占領 大友方は、田原親賢が門司城・赤間関を襲撃す

とというデマを流し、豊後水軍が防長の沿岸を抄掠し、防長の旧大内家臣を各地で挙兵させ、旧尼子家臣に働きかけて、尼子勝久を担いで、

山中鹿之助に富田月山城を攻撃させ、備後では藤井浩玄や浦上宗景、瀬戸内海で村上武吉を挙兵させ、十月、大内太郎左衛門尉輝弘に豊前の中小武士数百人を付けて、

周防秋穂に上陸させ、山口を占領させた。

大友宗麟の北 これに驚愕した毛利元就は、立花城からの撤退を命じ、すばやく数万の兵を長府へ撤収した。

部九州制覇 大友勢は追撃したが、戦果は多くなかった。

宗像氏貞・麻生摂津守隆実が協力して、芦屋や小倉からの渡



大内輝弘の花押



写真 4—20 大友宗麟
(大徳寺瑞峯院所蔵)

海を助けたからであつた。

立花城に残された一〇〇ばかりの兵は、半年前のごとく、大友方によつて無事湊まで送り届けられた。

毛利元就は門司城のみを残して九州から手を引き、以後、豊臣秀吉の九州征伐まで一七年間、兵を渡海させることはなかった。

高橋鑑種の 永禄十二年十月、筑前立花城から毛利勢二万余**小倉移封**が撤退した後、太宰府宝満岳城には二〇〇ほどの中国勢と高橋鑑種が孤立した。大友一族一万田家出身の鑑種の七年余にわたる抵抗に手をやいた大友方は、立花城督となった吉弘鑑理や好身の幹旋によつて、宝満岳城を明け渡した。

その条件は、

- ① 吉弘鑑理の次男を養子に迎え高橋鎮種（のち入道紹運）と称し、宝満岳城督とする。
- ② 高橋鑑種は、小倉城に移り、規矩一郡を支配し、毛利方が占領している門司城の仁保隆慰の支配地を侵略する。

というものであつた。鑑種は秋月種実の弟種冬を小倉で養子にしたというが、早逝したらしく、のちに末弟元種を養子として香春岳城に配置した。

長野助守と西郷隆頼の対立 長野助守については分からないことが多い。はつきりしているのは、永禄十一年（二五六

八）五月、長野筑後守が毛利方の者（到津氏被官云々）に暗殺されたあと、長野兵部少輔が三岳城を、長野三河守助守が等覚寺城を守備していたところを、吉川・小早川勢が猛攻して陥落させ、助守のみ豊後へ逃れたことである。

その後、長野助守が馬ヶ岳へ入るのはいつか。「太宰管内志」は『京都郡古志』を引用し、天正六年（二五七八）とし、松山城の項では「天正元年、長野三郎左衛門助盛に託せられ、馬ヶ岳ノ抱え城と成し、子息小三郎永盛在城す」とあつて、前後矛盾する。天正六年ならば、秋月種実・高橋宗仙が大友氏から自立する年である。

「太宰管内志」企救郡の条に「高橋宗仙は、秋月文種の子種実ノ兄を以て小倉城を譲り与え、高橋大蔵少輔種冬と号す。又、種実ノ弟元種を以て二男と成し、自ら共に田河郡香春城に居る。又、長野壱岐戦死し、その家断絶に及ぶの間、宗仙は一万田らをたよつて、大友宗麟に乞ひ、種実



長野助守の花押

ガ弟元種ガ兄三郎種信を以て長野家ノ家を継がしめ、長野三郎左衛門京都郡馬岳ノ城主なり云々」とあり、種信と助守が同一人であるような表現となっている。これは助守が高橋宗仙の小倉入封以前に等覚寺城主であったを考えれば誤りであることは明白である。

長野助守は、毛利勢退却後、一族戦死の恩賞として、天正元年（一五七三）ごろ、馬ヶ岳城督として、京都仲津二郡の守備と訴訟等の申次役を大友宗麟から命じられたと考えられる。なお、助守の子と思われる人物に長野式部大輔統重がいる。統重が助守の養子ならば辻褄が合う。しかし、長野種信の子が田原親宏の養子親貫といわれており、天正八年（二五八〇）鞍懸城（豊後高田市）で挙兵したことを思えば、年齢がかみ合わない。

「豊前古城記」（京都郡誌）に「一、城跡一ヶ所 郷大坂右は 西郷刑部左衛門高頼と云う者これに居る。大坂村興正寺え参詣の時、長野祐盛押し寄せ討ち取る。墓所は興正寺に有り、宇都宮の旗下とも云う。」と、長野助守が西郷隆頼を襲つて誅伐したと伝承している。いつのことであろうか。同じ大村に「いんしう城址」があると記しているが、これは杉因幡守重昌・隆哉父子の居城と考える。

毛利勢退去で松山城にいた杉隆哉は長州へ退去したと思われるが、西郷隆頼は、西郷文書によると香春岳城に籠城していた

模様であるから、降伏して
帰村を赦されたらしい。

長野助守と西郷隆頼は、
仇敵ともいえる間柄であつ

たと考えられる。隆頼は一貫して毛利方で、反服を繰り返してきた仲津郡に本貫を持つ国人であるから、助守が大友方として企救郡から入り込んで、領地に干渉することは不快であったのであろう。助守は一族を滅ぼした毛利に加担する隆頼を誅伐することが大友宗麟から課せられた宿題であった。したがって、その時期は、花尾城の麻生撰津守隆実が誅伐された天正三年（二五七五）ごろのことだろうと推定する。

覚

一、城井鎮房、申し表さるるの事

一、仲津郡の儀、御分別を成され忝なきの事、

一、香春両岳、慮外の事、

一、豊筑立柄の事、付、松山普請御延引の事、

一、愚息少輔五郎進退の事、

一、助守の人質、門司御城堪忍の事、付、質柄の事、

一、旧領京都郡並びに仲津郡、御証判頂戴の事、

以上

天正七年 九月廿八日

助守（花押）

（神代長野文書）

西郷隆頼の字と
花押

これは、日向高城敗戦後、大友氏から離反した長野助守が、毛利輝元へ臣従を誓い、秋月・龍造寺・高橋元種勢に対して、いままでの権益を保持しようとするものであろう。これによると、①城井鎮房は秋月種実・長野助守の離反勧誘に一年近くも応じなかったが、このころようやく毛利輝元の勧めで仲津郡を助守に返還したらしい。②香春岳は大友方の日田郡衆によって占領されたという意味であろうか。③当時、豊筑では秋月方と立花道雪・高橋紹運らが激戦中のため、松山城の再建が延期となったこと、④助守の子（式部少輔統重カ）に跡を委ねたいという意味か、⑤助守が人質を門司に差し出して、毛利氏に忠誠を示していること、⑥旧領京都・仲津二郡の安堵状を申請していることなど、当時の豊前の情勢を知ることができる。

これらを個条書きにして、使者に申し含め、毛利輝元に口頭で述べさせたいらしい。

松山城について、天正九年（一五八二）十月二十八日付の毛利輝元の書状がある。

豊州衆、境目に至り打ち出すの由、隆春・仁 常所より注進し候、最前の御父子の御紙面と同前に候、然る処、長野の事、松山取り付けるの由に候、不審無きにあらず候、高橋と内々宿意共候哉、それにつき、長野、この方に対し、別儀無く候はば、隆春と仰せ談ぜられ、異儀無く候様、御調肝要に候、（中略）

一、龍造寺・秋月・長野所江も切々使者・飛脚差し遣わされ、様牀聞き合

わされ、仰せを蒙るべく候、（下略）

（秋藩閩閩録卷六）

すなわち、長野助守が松山城再建にこだわっているが、高橋元種と宿意でもあるのだろうか、吉見正頼と内藤隆春（長門守護役）が相談して両者に問題が起らないよう取りはからえという。長野助守は本貫の地企救郡への帰郷を狙っていたようである。

龍造寺隆信・秋 天正六年（一五七八）、キリスト教を嫌つ

月種実の独立 た妻（奈多八幡宮司宇佐鑑基の娘）を離縁して、キリシタンとして洗礼を受けた大友宗麟は、日向国にキリスト教の理想国家を建設しようと、九州北部六か国から動員した兵四万余をもって、自ら無鹿（延岡市）に赴いた。家督の義統は野津まで出陣し、日向路軍と肥後路軍の総指揮をとつた。

島津軍の前線基地高城（木城町）攻撃で、四人の加判衆は意見の一致を見ないまま、十一月十二日、行動を開始し、惨敗を喫した。三人の加判衆と主な武将が戦死したため敗走をはじめ、耳川の渡りまで厳しく追撃されて、一万を超える死傷者を出して帰国した。

十一月二十六日、義統は肥後路を進んでいた南郡衆へ帰国を指令した。

天正六年十二月九日、龍造寺隆信が筑後の蒲池鎮漣と組み、筑後・肥後の国盗りを始めたと報じられ、翌七年正月には、秋



写真4—21 養島敗戦を慰める大友宗麟書状

月種実が高橋鑑種（入道宗仙）・長野助守と組み、筑前・豊前の国盗りを開始した。彦山座主舜有も秋月と同盟した。

養島合戦

大友義統は、加判衆六人のうち、三人が戦死したため、十二月九日、田原親宏を加判衆に加えてようとしたが、彼は届けもせず安岐城に帰ってしまった。

これには大友宗麟も狼狽し、ただちに腹心の柴田礼能らを派遣して、田原親宏の謀反を思い止まらせた。

その条件は、①宗麟の次男林新九郎親家を親宏の嫡子として

養子に迎える。②

親宏に本貫の地国

東・安岐両郷を残

らず返還する。③

娘婿である秋月種

実と手切れの証し

として、豊前西部

で早急に一てだて

をうつというもの

であった。

天正七年（一五

七九）正月、田原

親宏は、長門国の

杉重良と示し合わ

せて、養島（行橋市）へ渡り、京都・仲津二郡の奪回をはかった。

二月二十八日の大橋（行橋市）の合戦では勝利したが、小倉の高橋宗仙勢が到着して、形勢が悪化し、養島に追いつめられ、親宏は宗たる家臣を失って、国東へ帰り、同年九月病死した。

杉重良は椎田に上陸したが、待ち伏せにあい討伐された。弱冠二十五歳であった。杉重良は前豊前守護代重輔の子で、苅田松山城と旧領の回復を夢見て滅んだ。

高橋宗仙も同年四月病死し、養子元種が秋月種実の応援を得て、豊前東部への攻撃を強めた。

彦山の彦山では、座主黒川院連忠が秋月種実と結び、

焼き討ち永禄十一年（一五六八）ごろより大友氏と対立

し、同年六月二十日、大行事・下宮・北山殿・講堂等が日田・

玖珠郡衆によって焼き打ちされた。

翌十二年五月、座主連忠等は殺害され、連忠の弟舜有が座主となつて、大友氏と友好関係が築かれた（刀衆先代帳）。

天正七年（一五七九）正月、座主舜有は秋月氏に屈し、政所坊連長・伊良原因幡守を人質に出し、種実の三男を養子に迎えて、大友宗麟の子三位卿を養子とする約束を破棄した。

ここに大友宗麟は「彦山に悪党が楯籠もった」という理由で日田・玖珠郡衆を送って、天正九年（一五八二）十月、玉屋口・

別所口より攻め登り、社殿を悉く焼き払った。座主舜有らは、なお上仏来山へ登って抵抗を続けた。

宇佐宮 彦山焼き打ちの一月後、九州最大の古代勢力**焼き討ち** 宇佐宮が兵火によって、焼き払われた。地元では、キリシタンである大友宗麟が神仏を蔑ろにして焼き払ったと伝承しているが、これは、キリスト教信仰が犯罪とされた江戸時代の名残りである。

宇佐宮は、大内氏の守護大名的支配の一七〇年間、豊前国民の精神的支柱として統治に利用され、種々の保護を得て一社の自治が認められていたが、大友氏の戦国大名的、植民地的な寺社支配政策とたちまち対立した。

すなわち、大友勢豊前入国の翌年（一五五七）、宇佐大宮司いとうづきんすみ 到津公澄の裁判を社奉行（奈多八幡宮司鑑基）の許可を求めない越権行為として罰し、公澄の隠居と彼の所領三分の一を没収した。

更に永禄四年（一五六二）の門司城合戦の最中、到津庄（小倉北区）の公澄隠居所を破却し、子息公憲の大宮司館を破却したため、一社中の神官・僧侶が連名して、社奉行を弾劾した。永禄九年（一五六六）ごろ、毛利方の調略によって、公憲は反大友方となり、翌十年末、前大宮司宮成公建・時枝隆令・江嶋公綱・心乗坊公円らが自宅を焼き払って船出した。

更に、永禄十二年（一五六九）の立花城合戦中、社奉行奈多

鎮基が山野村（稲築町）の領地に移っていた公澄を殺害するにいたった。

天正七年（一五七九）四月、宇佐一社中は奈多鑑基・鎮基父子の非法一七箇条を掲げて決意を示し、翌年二月、田原親貫（親宏の養子、秋月種実の弟長野種信の子という）の乱に呼応して、はじめて公然と挙兵し、宇佐郡の大友方の村々を焼き打ちした。

この時は、七月に「一社の儀も詫び言半ば」（永弘文書）とあるから、まもなく屈服したらしく、善光寺辺に潜伏していた田原親貫を時枝氏が殺し、首を大友宗麟へ差し出している。

この年、高橋元種・長野助守らは宇都宮鎮房（天正七年九月には秋月種実に与同）とともに、上毛・下毛・宇佐郡に侵入し、田原親貫を支援しようとして大友方の国人と合戦を繰り返した。

天正九年（一五八二）八月、「一社中、慮外の覚悟深重」と宇佐宮社官衆が再挙兵したと、屋山（豊後高田市）城督吉弘統運へ知らせが入り、田原親家を大将として、田原紹忍・吉弘統運・安心院麟生・佐田鎮綱ら国東・院内衆七〇〇人余が宮中を包囲し、十一月十九日の総攻撃によって、「当山焼亡」した（益永文書・郷司文書）。

高橋元種 天正九年、彦山・宇佐宮が大友方によって焼
豊前制圧 き打ちにあったところ、高橋・長野・城井勢は

上毛郡・下毛郡へ攻勢をかけ、野仲氏・福島氏らと合戦を繰り返していた。

次の史料には当郡の武士の名が数多く見られる。

「これを一見す（花押）」（毛利輝元）

去る廿八日、下毛郡□□多布原両村、於是城討ち捕る頸着到

頸一 稲本掃部丞	黒水加賀守討捕之	同一 一百富与介	大津弥助討捕之
同一 稲本与右衛門尉	神代駿河守討捕之	同一 平田助三郎討捕之	
同一	長野河内守討捕之	同一 小城山城守討捕之	
同一	同河内守被官討捕之	同一 同山城守被官討捕之	
同一 飛田源六	恒吉左京亮討捕之	同一 高塚甚次郎討捕之	
同一 橋本小次郎	花田右京進討捕之	同一 早河長左衛門討捕之	
同一 茂吉治部丞	小袋次助被官討捕之	同一 瓜生平五左衛門討捕之	
同一 大木四郎	同次助被官討捕之	同一 方武藤太兵衛討捕之	
同一	池尻佐渡守討捕之	同一 岡金七郎討捕之	
同一	末松出雲守討捕之	同一 千代丸弥七郎討捕之	
同一 松丸小次郎	安東内膳亮討捕之	同一 末松新左衛門討捕之	
同一	同内膳亮被官討捕之	同一 光富猪介討捕之	
同一	後藤勘解由討捕之	同一 賀来与一討捕之	
同一	樋口対馬守討捕之	同一 賀来半次郎討捕之	
同一	渡辺大学亮討捕之	同一 仲間市佐討捕之	
		同一 賀来清左衛門討捕之	
		已上	

戦死者着到

吉村彦次郎	賀来甚左衛門尉	神代駿河守被官孫八郎
伊田三郎	安座上喜介	安東内膳亮被官彦六
賀来主税允	黒水加賀守被官清兵衛	恒吉左京亮被官三郎五郎

以上

疵を被る者着到

刀疵二ヶ所甲ノ上、左ノ肩	植田老岐守	矢疵左ノ膝	庄崎勘兵衛尉
刀疵左ノ膝	進藤平次郎	矢疵左ノ腰	則松甚三郎
刀疵左ノ腰	小城又次郎	鎗疵左ノ腕	大庭四郎
刀疵肩	清水右京進	鎗疵右ノ膝	平田与三
手火矢疵左足	田村源内允	刀疵甲ノ上	兵藤勘四郎
刀疵二ヶ所両ノ手	河藻助九郎	矢疵右ノ肩	平井喜介
手火矢疵左足	賀来与一	平田助三郎被官喜三	
刀疵二ヶ所左腕、右ノ足	後藤源三	溝口内蔵丞被官藤十郎	
鎗疵左ノ膝ノ上	狩野源助	長野中務丞被官又七郎	

已上

右の前、宜しく御披露に預かるべく候、

天正九十一月廿日 長野式部大輔 統重（花押）

市川伊豆守殿

仁保常陸介殿

（神代長野文書）

これは、天正九年（一五八一）十一月二十八日の山国川両岸での野仲鎮兼との合戦で長野統重の手の者の勲功を書き上げ、



高橋元種の花押

門司城督市川経好・仁保隆慰から毛利輝元へ披露を願い出たものである。

大友方は下毛郡賀来切寄きりよせ（中津市黒水付近）・築地切寄（同市福島）に集まり必死に防戦する状況であった。

天正十年春、野仲鎮兼は大友方として上毛・下毛両郡で、高橋・長野・城井勢と苦戦していたから、大友義統は玖珠郡衆に加勢を命じていたが、豊後勢の到着まで持ちこたえられず、屈服した。

野仲鎮兼の下毛平野部進出に抵抗していた成恒鎮直・賀来安芸守・福島佐渡守らもあいついで高橋元種に下り、所領の安堵を請うた。

同年の十月には、かつては、宇佐郡の武士の棟梁といわれた安心院氏が太友氏から離反し、田原紹忍・親盛父子は妙見岳城を守るのがやつの状況であった。こうして、高橋元種が豊前全域に号令を出すにいたった。

天正十一年（一五八三）四月、長野統重の書状に「豊州表巷せうしゅうへいぎやう説の事」と、大友方の豊前出陣の動きを報じており、八月には高橋元種の所へも、宇佐三家（時枝・宮成・江嶋）より、豊州衆が出張してくると報告が入り、九月、玖珠郡・肥後小国衆が下毛郡万田切寄まだきりよせ・是則切寄これのりへ、国東・府内勢が宇佐郡佐野切寄に押し寄せ、これらの城塞を破却し、宇佐・下毛二郡を奪回し

て帰国した。

その後も宇佐郡では時枝氏を中心とする宇佐三家勢が優勢で、妙見岳城の孤立状態は変わらなかった。下毛・上毛郡では高橋方となった野仲鎮兼が支配領域を一層拡大させていた。